
文字喰い少年

あけがらす。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文字喰い少年

【Nコード】

N35230

【作者名】

あけがらす。

【あらすじ】

大人はきつと、言葉を食べるのを止めてしまった。

ひよい、とドップラー効果をひとつつまんで、僕はくちやくちやとそれを口の中で転がした。湿気たプラスチックの味がする。噛んでも味やビタミンの出るものではなさそうなので、もう一度それを一噛みすると、ぺいっと惜しみなく吐き出した。

「あんたはそうやって、言葉を噛み捨てるのが好きだな」シヨボシヨボと情け無さそうに消えてゆくドップラー効果を眺めながら、黒ウサギはクツクと笑って呟いた。「よくまあ、飽きずにそう口にできるものだ」

「百粒イチゴがあったら、一粒くらい甘くたっていいだろう？」僕はそう応えると、足元に群れを成して行進している小さな八行を一掴み、コーンフレークのようにザラザラツと口の中にまた放り込んだ。これは何度も食べているので知っている筈なのだが、全体的に渋く、劣化した茶葉を食べている気分になることにどうしても顔をしかめずにはいられない。しばらく八行は、突然自分達にまとわりつく唾液と粘膜に驚いていたが、やがて状況に慣れてきたのか、舌の上でヒとビが手をつなぐと、「罅」という小難しい漢字になってザルザルと突起を生やし、渋味を惜しむことなく撒き散らしながら震えだした。不味い！

僕は口の中に指を突っ込み、罅を取り出すと「一刻も早く消えちまえ！」という感想と共に放り出した。黒ずんだ色がアスファルトに紛れて見えなくなる。

「ほれ見る、きっと美味しい言葉なんて見つからないんだ」

黒ウサギは僕が言葉を噛んだように、クセの強いハーブの臭いがする煙草を、口をすぼめて吸い込んだ。「煙草や酒のほうがよっぽど味を楽しむには効率が良いよ。あんた、ブラックジャックの途中で『ブタ』とか『パンデモニウム』とか吐き出されてみる、こっちはたまらないんだぜ」

「悪かったな」でも、美味しい言葉なんてものはこの世の全ての言葉を消化しないとわからないだろ、と、僕はヒトビが家出した八行を今一度噛み直しながら続けた。「それに、俺は言葉が好きなんだ。美味しいかどうかは別にして、愛してるから」

「歪んだ愛だな」

黒ウサギは理不尽なくらいに黒い瞳を細めると、僕のほうへ向かって道端を歩いていったシュレディングーを投げてよこした。「ほらよ。お前、こういう珍しいやつ好きだろ」

「確かに、見慣れない言葉だな」サンキュ、と短く口笛を吹くと、僕はシュレディングーをつまんで、無遠慮にジロジロと眺め回した。初めて見る言葉だ。ほのかにジンジャークッキーの匂いがするシュレディングーは、しつぽを触られているのが気に入らないのか、僕の手の先で空気をたくさん含んだ悲鳴を上げて暴れ回っている。彼女の細く鋭い爪が、カリリと小さな傷を手の甲に作った。隣で、黒ウサギが「案外凶暴なんだな」と面白そうにその様子を眺めていた。「……全くだ」僕も言った。ジンジンとした鈍い、プラスチックのような痛みが手の甲から振動してくる。「美味そうだが、この口の中で暴れられたらもう二度と文字が食えなくなりそうだな」

シュレディングーは相変わらず牙を剥いて手足を乱暴に振り回し続けている。味見程度に舐めることすら躊躇われ、地面にそっとシュレディングーを逃がしてやった。柔らかいしつぽの感触が一瞬指先に触れ、またすぐに離れてゆく。彼女は水溜りに二つの濁点が濡れるのも構わずに、ジンジャークッキーの匂いだけ残してあつという間に僕のもとから去っていった。なんだか素っ気ない。

「あれが百粒目かもしれないかったのに」黒ウサギはシュレディングーの行方を目で追いながら呟いた。

「何、百一粒目を探ささ」僕は黒ウサギに応えようと、ぐっと八行を呑み込んだ。これもそんなに美味くないが、なにしろ僕には栄養が必要なのだ。僕が口を開く度に言葉はやたらと浪費されるのだから、僕は相当な量の言葉を食べてゆかねばならない。それは他の生

き物にも共通の筈なのに、なぜかせつせと取り込んでいるのは僕だけだった。

きつと、他の人たち（勿論、黒ウサギも含めて）は、大人になったら使い古して手垢のついた言葉しか喋れなくなるのだろう。

「ところで、もうそろそろ出発しないか？」黒ウサギはすつくとベンチから立ち上がると、スーツケースを握り直した。「次のフライトに間に合わなくなるぞ」

「……そうだな」僕も自分のスーツケースを持つと、黒ウサギに続いた。

「機内食はミートボールかな」

「俺は鮭のマリネに賭けるよ」

「一回だって当たったこと無いくせに」

「あんたこそ」

「俺が期待してるのが、食後のコーヒーだけだからかな」僕は胸元を飛んでゆく、誰かの口から出たてなのであるうキャンディーを手のひらで静かに受け止めながら言った。「あの湯気からほんの時々出てくる言葉、すごく美味いんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3523o/>

文字喰い少年

2010年10月17日00時55分発行